



榆 蔭

Yuin

北海道大学附属図書館報

目 次

巻頭言

大学図書館の社会貢献—大学の第三の機能としての知の転移
教育学研究科教授 姉崎 洋一 …………… 1

お知らせ

レーン先生ご息女キャサリン・ブルーワー氏がレーン文庫を訪問…… 6
来館日誌（平成17.11. 1～平成18. 2.28）…………… 7
生まれ変わった閲覧室—北分館改修工事終わる …… 8
北海道大学学術成果コレクション（HUSCAP），実験版から正式運用へ… 9
獣医学研究科・獣医学部で「MEDLINE/PubMed講習会」を開催しました… 10
「樺太展」で北方資料を展示しています …………… 11

新企画

「本は脳を育てる～北大教員による新入生への推薦図書～」はじめました！ …… 13

出張報告

トロント大学,ロチェスター大学, DASER 2 Summit
情報サービス課相互利用係 小坂麻衣子
情報システム課システム管理係 鈴木 雅子 …… 15
国際会議Open Repositories 2006とクイーンズランド工科大学・オーストラリア国立大学訪問
情報システム課目録情報係 堀越 邦恵 …… 17
教員著作寄贈図書（平成17.11. 1～平成18. 2.28） …… 20
会議（平成17.11. 3～平成18. 3.17）…………… 21
学術成果発信小委員会委員名簿 …………… 23
人事往来 …………… 23

大学図書館の社会貢献 —大学の第三の機能としての知の転移

教育学研究科教授 姉崎 洋 一

はじめに

図書館・情報学の専門家でもなく、現在の大学図書館のヘビーユーザーでもない、大学構成員の一人の教員に過ぎない私が、『榆蔭』の巻頭言を依頼されたときは、正直戸惑った。ふとしたきっかけで、地域の図書館事情を良くしようとする「北の図書館5人の会」（注1）に加わり、そこに何ほどこかの小文を書き、『榆蔭』編集委員の目に止まったのが発端のようであ

る。私が大学図書館に何か言うことができるとすれば、高等継続教育というジャンルの研究者の端くれであること、図書館（地域の公共図書館、学校図書館、専門図書館）などの文化教育施設への市民運動の領域に比較的細く長くコミットしてきたこと、それにごく普通の大学教員として図書館を利用してきたことがあげられるに過ぎない。もっとも、「専門家」の「知の支配」（エピステモクラシー）の時代に、アマチ

ユアの視点が案外重要かも知れないということ
を頼みに、以下の文を綴ることをお許し頂きたい。

図書館というものにつきまとうイメージ

近代公共図書館の歴史が、例えば英国などでは、メカニック・インスティテュート附設の会員制図書館の寄贈など民衆的基盤の上に成立したことは、かつてT & E・ケリー夫妻の名著『イギリスの公共図書館』（邦訳、東大出版会1983）などにも生き生きと描かれていて、思わずその文章に引き込まれたことを思い出す。このことは、ホレス・マンなどの無償制学校運動（注2）と連動する米国の公共図書館運動、あるいは、帝政ロシアからの脱却を政治革命だけではなく、民衆の知的開眼に期待し図書館の普及を重視したN・クループスカヤの思想（注3）などにも共通する、知識と情報への均等な機会の提供手段としての図書館への期待と信頼を示す欧米人のコモンセンスといえた。もっとも、日本が他の教育諸制度がそうであったようにその国家的官房性が図書館の出発点であって、欧米に比して民衆的基盤や開かれた図書館像づくりが遅れていた云々とあげつらうつもりはない。

ただ一言すれば、戦前の勅令的な法規範（図書館令、1899年）があったとはいえ、国立国会図書館（同法、1948年）、日本の公共図書館（図書館法、1950年）、学校図書館（学校図書館法、1953年）のいずれも、法的整備を第二次大戦後に出発させ国民の関心の弱さ、財政事情の厳しさ、政策担当部門の認識の低調さもあり、乏しい予算、施設配置の地域的不均衡、専門職配置の弱さなど、行財政の条件整備の貧しさが常につきまどってきたことは否めない。その結果、国民の生活場面での図書館体験の脆弱さをもたらした、日本的な貧しい図書館事情をかたちづかってきたことは事実であろう。

いきおい、学校図書館のみならず、専門図書

館や大学図書館（戦前以来の比較的長い歴史を有するが）の利用において、権威的で閉鎖的といった図書館イメージが長く続いたといえる。利用者サイドから見るとその内側に閉じたシステムの硬直性が指摘され、また他の図書館との連携・ネットワークの構築の遅れを誘引してきたことは歴史的な事実であろう。

図書館イメージの開眼と転換への動き

ここで少し視点を変えてみよう。読まれた方も多いと思われるが、菅谷明子著『未来をつくる図書館—ニューヨークからの報告』（岩波新書、2003年）は、NPOの運営によるニューヨーク公共図書館の多様な役割と機能の紹介によって、日本人の図書館のイメージを大胆に塗り替える問題提起の書であった。「図書館で夢をかなえた人々」という意表をつく序章に続き、新しいビジネスを芽吹かせる、芸術を支え、育てる、市民と地域の活力源、図書館運営の舞台裏、インターネット時代に問われる役割、日本の図書館を「進化」させるために、という刺激的な章の連続は、図書館と起業、ビジネス支援、芸術支援・育成、ボランティアな市民活動の支援など日本の図書館にはないイメージを提起し、既存の発想からの脱却を示唆した。経歴紹介によれば、菅谷は、北海道出身でカナダ留学、『ニューズウィーク』日本版スタッフを経て、コロンビア大学大学院にて国際関係論とメディアジャーナリズムを学んだ。その後、経産省研究所研究員、ジャーナリスト、東京大学大学院情報学環MELL（メディア表現、学びとリテラシー）プロジェクトチーフプロデューサーを歴任している。菅谷が提起した問題は、知識基盤社会における図書館と利用者のあたらしい相互関係の文脈づくりにあり、しかもその視点は必ずしも経済的社会的に強い利用者だけに向けられている訳ではない。むしろ不利益な立場にある人々の夢の実現への後押しということにあったように見えた。残念ながら、その後の

日本の産業界と省庁サイドの受け止めは、起業やビジネス支援に結びつく情報発信機能にもっぱら焦点化された図書館情報施設づくりもしくはそれへの転換を促す政策形成であり、私には、それはいささか一面的と思われた。

菅谷の問題提起をまっすぐに受け止めれば、図書館が、単に既存の学術的文化的ストックの知の伝達や提供だけではなく、知的創造の環境に恵まれない人々にとっても、新しい知の孵化機能を果たし、知的パラダイムの更新、技術や芸術などのアイデアやデザイン創造、ボランティアやNPOなどの市民活動の発信スペースになるというイメージーションが求められているということであろう。それは、単純にビジネス支援という意味だけではなく、知的創造と享受の現代的な公共空間づくりとしての図書館という重要な視点を示唆するものといえる。

転換期の大学と大学図書館

図書館を、現代的な知の公共空間として考えると、大学図書館はその提起を受け止めて、何を考え、何を变える必要があるのだろうか。言うまでもなく、大学図書館は、大学に附設される専門研究図書館であり教育図書館である。大学の機能を発揮する上での情報と知のアクセスにとって、多様な水源からの流れを受ける知の泉である。大学図書館を欠いた大学は、大学とは言えない。大学図書館は、大学、大学院設置基準上欠かせぬ主要施設であるだけでなく、大学の研究教育の生命線の一つである。ここには、基礎的な学術・文化の生成・蓄積・継承・受発信機能の主要な拠点として、さらには高度先端科学技術の開発拠点として、またそれらに関連する中枢的な人材の育成・供給拠点として大学が果たしてきた役割があり、それを持続的に発展させる上で、図書館の貢献が期待されていると言うべきである。

しかし大学図書館がよって立つ大学は今や大きな変動転換期にある。すなわち、かつての

「大学の孤独と自由」(H. シェルスキー)の上に、特権と孤高を享受するようなスタンスはもはや許されず、M. トロウを引くまでもなく(注4)、エリート段階、マス段階を経てユニバーサルアクセス段階に突入している大学の大量化状況は、大学の性格を大きく変えてきている。また、グローバリゼーション下にある知識基盤社会において、国民競争国家化の強まりは、高等教育の競争力強化を不可欠の要件としてきている。いわゆる大学の4つの機能たる、研究・教育・管理運営・社会貢献のすべてに亘る根本的な改革とイノベーションは、今日の教育改革の重要な焦点をなしている。また、大量化を支える財源確保問題は、高等教育改革が避けては通れない世界的な大きなアジェンダ(協議主題)である(注5)。この点で近年目立つのは、大学は単に「知の共同体」あるいは「知的創造の公共空間」としてだけではなく、「知の経営(企業)体」としての資産獲得マネジメント力量と「競争に勝つ大学」としての卓越したリーダーシップとガバナンスが不可欠であるといった言説の跋扈である。この意味では、国立大学法人化(2004年)は、その「構造改革」への転換を迫る歴史的「事変」であった。筆者は、「法人化」については、その制度設計もそうであるが、もたらしている現実から判断して必ずしも肯定的になり得ない。しかし、ここでは、勿論その多岐にわたる「争論」の「火薬庫」に不用意に立ち入るつもりはない。

むしろ、ここでの課題に即して言えば、このような「改革」と「外圧」が故に、大学図書館は、どのようなスタンスで研究・教育に貢献するのか、また大学がこれまであまり深く考えて来なかった大学と外部社会との連携、協働に対して、何を貢献していくかである。

情報化・IT化対応を迫られる大学図書館

ところで大学改革を促進しているもう一つの

問題に、IT化がある。その波を最も強く受けているのは、企業とともに大学である。大学図書館もそれに対応して多くの革新を迫られてきた。従来のカード検索に代えてのインターネットとリンクした資料・情報データベースの集積とネットワーク化、学術雑誌などの電子ジャーナル化、著作権、複写権など、知的財産・所有権の問題などがその中心をなすようである(注6)。これらには、予想外の経費が必要であり、図書館費の節減が課題とされている。そのために、職員人件費削減や中央図書館機能の拡大と部局図書室の縮小化、一部に業務の外部委託が進展していると聞く。司書をはじめ図書館職員は少ない人数の中で増大する業務に忙殺されている。

大学の第三の機能としての社会貢献と知の転移

ここで、それに加えてあらたな課題を提起するのは、お叱りを覚悟しなければならないが、今大学図書館に必要なのは、IT化対応だけではなく、また研究機能の強化だけではなく、教育機能の強化であり、これまであまり熱心とは言えなかった、社会貢献機能の強化である。大学と社会との連携・パートナーシップの構築、社会貢献については、別に論じたことがあるが(注7)、大学にとっては新しいチャレンジな分野であろう。たとえば、OECDの『地域社会に貢献する大学』(邦訳2005, 玉川大学出版部)に見られるように、地域開発とガバナンス、地域連携のための大学経営、地域社会貢献のマネジメントは、大学・高等教育機関の「第三の役割」(社会貢献のミッション)の自覚を求める。それは別の言い方をすれば、大学と地域社会相互が有する資源の「知識転移」機能や、交流の活性化をはかることにある。従来、研究センター型大学は、「社会貢献」には必ずしも自覚的とはいえなかった。そこで、最後に、この点での私見と提案を述べて文を閉じたい。

第一は、開かれた大学図書館機能をどう工夫

して広げるかである。大学構成員の利用のみならず、地域住民や外部社会への開放は、単に利用と貸し出しの現状のままでよいのか。研究・教育機能に支障のない範囲という制限は止むを得ないとして、これまで外部社会にドアを閉ざしがちだったことへの反省と転換は、前述の菅谷の提起のようにもっと豊かに発想できないか。これは、中央図書館だけではなく、部局図書館(室)も同様である。

第二は、図書館間のトライアングル型重層ネットワーク化の促進であろう。大学・専門図書館、公共図書館、学校図書館の三つの異なる図書館間の生きた交流とネットワーク化は、北海道図書館大会や北海道図書館連絡会議などに一部試みられ、図書館の種別を超えた「北海道図書館横断検索システム」の構想もあるが、まだ残念ながら十分とは言えない。この点で、北大のリーダーシップとパートナーシップの発揮が求められているのではないだろうか。図書館ネットワークによる「知識転移」の活性化は、社会的起業にとっても、住民の大学への信頼、学校の学びの広がりにとっても重要である。

第三は、このような大学図書館の社会貢献への自覚が広がることによって、出版機能(大学出版会などとの連携)や研究紀要等の資料センター機能が促進され、利用者のニーズに応える、レファレンス、リクエスト業務の質的改善が期待されるのである。

第四は、大学図書館として「図書館に訊け」(注8)と胸を張ってほしい。そして、羽仁五郎や中井正一のとなえた「真理はわれらを自由にするという確信」(国立国会図書館法前文)をもって、研究・教育に加えて、上述した社会貢献への新たな努力を期待したいのである。

注1 「北の図書館5人の会」は、みんなの明日を拓く図書館を！北の大地に図書館を！をかけた、『北の図書館』（現在6号）を刊行し、地道ながら公共図書館、学校図書館、専門図書館、大学図書館などをネットワークする論壇を提供し、政策提言を行ってきている。

URLは、以下である。

<http://homepage2.nifty.com/kitanotosyokan/index.htm>

注2 ホレス・マン『民衆教育論』（久保義三訳，明治図書，1960年）

注3 N. クループスカヤ「ヴィボルグ区議会の文化・教育局」（1917）（クルプスカヤ選書6『国民教育と住民参加』村山士郎訳，明治図書，1974年）

注4 M. トロウ『高学歴社会の大学-エリートからマスへ』（東大出版会，1976年），同『高度情報社会の大学-マスからユニバーサルへ』（玉川大学出版

部，2000年）

注5 田中昌人『日本の高学費をどうするか』（新日本出版社，2005年）参照。世界人権規約第13条2（b）（c）の「中等教育」および「高等教育」の「無償教育の漸進的な導入」に関して、わが国政府は批准を留保している数少ない3カ国の一つであるが、高等教育の財源をいかなる形で確保するかは、国際的にも重要な争点である。

注6 たとえば文部科学省「平成16年度大学図書館実態調査報告」について，B. L. ホーキンス他『デジタル時代の大学と図書館』（玉川大学出版部，2002年）参照。

注7 姉崎洋一「大学と地域社会のパートナーシップ構築は可能か？」（『発達・学習支援ネットワーク研究』第1号，北大大学院教育学研究科，2005年）参照。

注8 井上真琴『図書館に訊け』ちくま新書，2004年



お知らせ

レーン先生ご息女キャサリン・ブルーワー氏がレーン文庫を訪問

去る11月28日にレーン先生のご息女、キャサリン・ブルーワー氏とそのご子息であるマーク・ブルーワー氏が、附属図書館北分館の「レーン文庫」をご覧に来館されました。レーン先生記念文庫は、北大教養部で通算30余年教鞭をとられた、故ハロルド・エム・レーン先生が1963年に急逝された後、先生の蔵書が教養部のために寄贈されたものです。その後、教養分館(現北分館)が完成したのを機会に、北分館にて所蔵し、現在に至っています。「レーン文庫」の中には、レーン先生直筆のメモが記入されている本も多くあり、大平北分館長の説明のもと、30分ほどの時間の中で両氏とも熱心に、また感慨深げにご覧になっておられました。



熱心にご覧になるキャサリン・ブルーワー氏とマーク・ブルーワー氏



左から岩佐教夫学務部長、大平具彦北分館長、木下俊郎名誉教授、キャサリン・ブルーワー氏、マーク・ブルーワー氏、レーン小委員：土田映子講師、レーン小委員：奥聡助教授

ハロルド・エム・レーン先生

レーン先生は1892年米国アイオワ州に生まれ、ウイリアム・ベン大学とハヴァアフォード大学に学びました後、1921年、旧北海道帝國大学予科外人講師として来日し、英語の教鞭をとられました。1922年には、札幌在住の米国人宣教師ローランド博士の長女ポーリン夫人と結婚され、太平洋戦争の始まる前数年は夫人もまた予科生に英語を教えられま

した。1941年、太平洋戦争が始まると夫婦は敵国人として抑留され、多くの辛惨を嘗めた後米国に送還されました。

1951年、国立大学に外人講師の制度が復活した時、夫妻は再び札幌に帰られ、レーン先生は1963年夏に急逝されるまで、北海道大学教養部において、英語教育にあたられました。

1965年には、本学の英語教育に多大の貢献をされたレーン教師御夫妻の御功績を記念してレーン奨学金が設立されました。この育英資金は、教養部2年次に在学し、英語の成績が優れ、レーン先生御夫妻が北大と日本のために尽くされたその精神にふさわしい学生に贈られてきました。

この育成資金制度は、1995年度に教養部が廃止となったことに伴い見直しがなされ、現在では、レーン先生のご功績を末永く記念し、レーン記念賞として、2年次の学生で英語の成績が特に優秀な学生に対してレーン氏の記念メダルが授与されています。

来 館 日 誌

(平成17年11月～平成18年2月)

No.	来 館 者	来 館 日	時 間	人 数	備 考
1	札幌大学文化学部学生及び 引率教員	11月1日(火)	14:30-15:30	16	北方資料室見学
2	北海道大学文学部学部生(1年) 関孝敏教授(大学院文学研究科) の指導のもとに	11月1日(火)	16:50-17:15	15	北方資料室見学
3	ハワイ大学教員	2月8日(水)	9:40-10:20	8	北方資料室見学
4	北海道釧路湖陵高等学校 図書館員生徒	2月8日(水)	9:30-11:30	5	カウンター業務 等体験
5	サハリン国立大学(副学長, 教員5名), サ ハリン国立文書館(館長, 副館長2名)ス ラブ研究センター原教授, 荒井教授が引率	2月20日(月)	9:40-11:40	7	北方資料室見学
計				51	



北方資料室を見学するハワイ大学教員一行



カウンター業務を体験する釧路湖陵高校図書館員

生まれ変わった閲覧室—北分館改修工事終わる

附属図書館北分館は、教養図書資料の整備と、全学教育への支援を二大任務としております。北分館は、受験勉強を終えて憧れの大学に入った学生たちが最初に訪れる大学施設のひとつであり、そのためにも学習環境、知的環境の整備は、学生を意欲的な勉学に向かわせる上で非常に重要な要素です。

北分館は最近老朽化が進み、しばらく前から図書館としての環境整備が強く望まれてきましたが、幸い、逸見新館長の尽力を得て、平成17年度総長重点配分経費（「キャンパスの充実に関する事業」および「教育用設備」改善）により、長年の願いであった北分館の改修工事が実現することとなりました。工事は平成17年11月15日より始まり、段階別の改修を経て、今年3月31日に終了いたします。

改修工事の内容は以下の通りです。

- (1) 1～3階の床，壁，柱，天井の改修
- (2) 照明器具の一新
- (3) 1階にロビー風自由閲覧コーナーを設置
- (4) 3階に新たに閲覧机を8台設置
- (5) 1，3階のトイレの改修
- (6) 空調設備の改修により大きな通風音を解消



以上の工事により、閲覧室全体が明るく落ち着いた雰囲気生まれ変わりました。ちなみに床じゅうたんは、1階がイエロー系、2階がグリーン系、3階はピンク系（4階は今回は工事がないので従来通りグレー）に色分けされ、大変モダンな感じになりました。特筆すべきは、空調設備の改修により、これまで懸案であった異常に高い通風音が解消したことです。これにより快適な閲覧環境を実現することができました。なお、貸出し等のサービス業務や図書資料の配置については、従来通りで変更はありません。

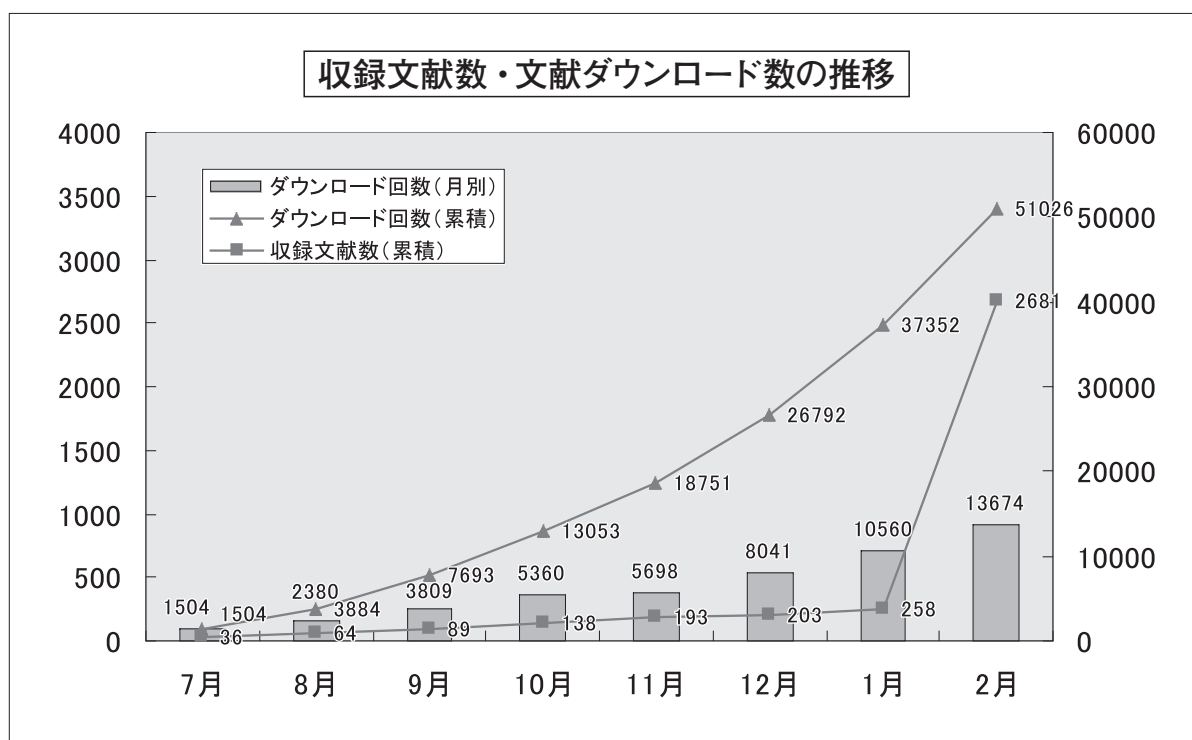
館員一同、新しく生まれ変わった北分館をこれまで以上にご利用していただくことを心より願っております。最後になりますが、総長をはじめ関係各方面のご配慮ご尽力に、厚くお礼申し上げます次第です。

北海道大学学術成果コレクション (HUSCAP), 実験版から正式運用へ

HUSCAPは、本学の構成員がその作成に関わった電子的形態の学術資料を網羅的に収集・保存し、インターネットを介して学内外に公開することによって、本学において創出される学術成果を社会に還元し、本学の社会における説明責任を果たすとともに、当該成果の可視性向上ならびに学術情報流通の活性化を促すことを目的とする新たな情報発信システムです。

附属図書館では、平成17年7月からHUSCAPの実験運用を実施し、予定どおり平成18年2月末日で一旦終了しましたが、現在も暫定運用中です。実験期間中は、多くの教職員及び院生・研究生等の皆様にご協力・ご参加いただき、誠にありがとうございました。

実験結果の概略は以下のとおりです。



また、本年1月からは、HUSCAPコンテンツ拡充方策の一環として、本学で刊行される研究紀要類の電子化を支援しHUSCAPを介して公開する「研究紀要等電子化支援プロジェクト」を立ち上げました。このプロジェクトでは、2月末現在で10の研究科等から紀要等の電子化のお申し出をいただき、既に19タイトルの電子化について具体的な作業に入っています。

附属図書館では、この運用実験の結果データ等を基に、本年4月から附属図書館の事業として本格的にHUSCAPの構築・運用を推進していくこととしました。

正式運用開始を機に、広報活動の充実やシステムの改善、制度設計の見直し等を更に進めてゆく所存ですので、皆様のより一層のご協力をよろしくお願いいたします。

(情報システム課)

獣医学研究科・獣医学部で 「MEDLINE / PubMed講習会」を開催しました

平成18年1月18日(水)、附属図書館情報リテラシー教育支援ワーキンググループと獣医学研究科・獣医学部図書系の共催で、獣医学研究科・獣医学部情報演習室に情報基盤センターが配置している12台のPCを使用して、「MEDLINE / PubMed講習会」を開催しました。

参加者は、学部学生が7名・教員が2名の合計9名でした。

内容は、「MEDLINE on Ovid」と「PubMed」の使いかたを、受講者各自がPCを操作しながら実習を行いました。

今回の講習会は一から内容を組み立てるのではなく、医学研究科・医学部図書閲覧係が医学部臨床実習コース「医療情報学」の実習の中で行っている「文献検索ガイダンス」をベースにして、獣医学研究科・獣医学部用に修正して行いました。

参加者アンケートによると、「役にたった」や「次回も機会があれば参加したい」などの声が寄せられ、獣医学研究科・獣医学部にもこのような講習会の需要があることがわかりました。

「附属図書館情報リテラシー教育支援ワーキンググループ」は全学の図書系職員の中から12名が集まり、講習会を今後どのように実施するか検討しています。

今回の講習会は、研究科・学部等で行う講習会としては演習や授業によらない初めてのものとなり、「このような講習会が研究科・学部等で需要があるのか」、「ワーキンググループのような学部をまたいだ図書系職員の共催による実施の可能性と問題点」などを検証しました。

新年度には、理学研究科・理学部で理学研究科・理学部図書係とワーキンググループと共催でWeb of Science講習会を実施する予定です。ご興味のある方は是非ご参加ください。また、授業・ゼミ・友人同士などでお集まりいただければ、附属図書館で講習会を実施します。平成18年度は、各研究科・学部等での出張講習会も検討しています。

ご希望の方は、附属図書館参考調査係(内線:2973, e-mail:ref@lib.hokudai.ac.jp)へお問い合わせください。

なお、この講習会では情報基盤センターのPCをお借りしました。

受講者の理解を深めるためには、一人一台のPC環境は必須であり、PCの利用を許可していただいた情報基盤センターのご配慮・ご協力に心より感謝申し上げます。

(情報サービス課参考調査係)

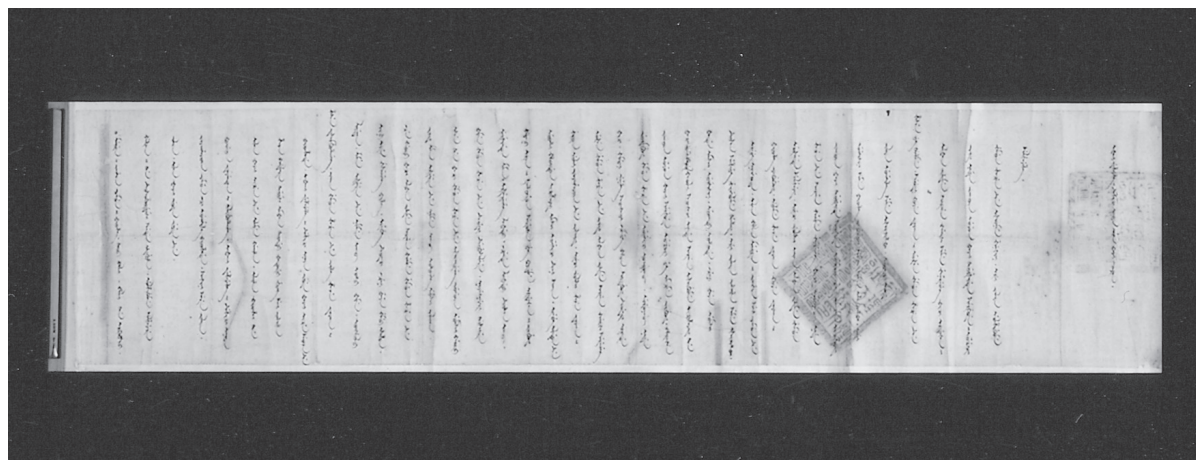
「樺太展」で北方資料を展示しています

今、総合博物館では、北大創基130周年記念の企画展示「北大樺太研究の系譜—サハリンの過去・現在・未来—」（「樺太展」）が開かれています（2月18日から5月7日まで）。そこに、附属図書館北方資料室の古地図、巻物、写真その他、樺太関係資料が十数点展示されていることをご存じでしょうか。その中には、近藤重蔵や松浦武四郎といった北方に深い関わりを持つ探検家の蝦夷（北海道）・北蝦夷（カラフト）の古地図も含まれています。

北方資料室には、この他にも数多くの貴重な北方関係資料がありますが、学内で公開される機会はあまり多くありません。そこで、今回「樺太展」の展示を機に、北方資料をさらに知っていただけるよう、展示資料の一部をご紹介します。

「お宝はどれや？」——ヤエンコロアイヌ文書

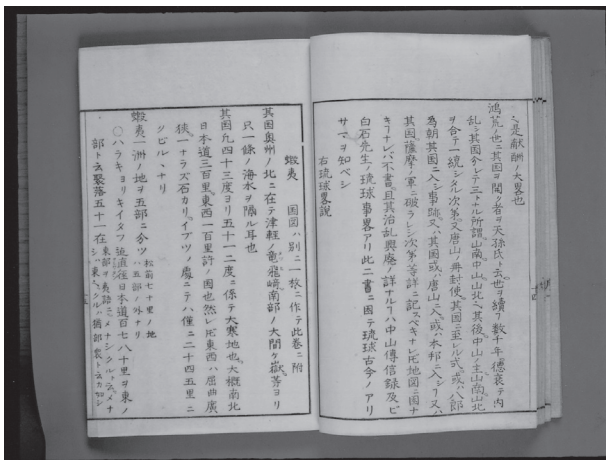
関西の大学関係者が来室した際の第一声がこれでした。そういう方に真っ先に紹介したいのは『ヤエンコロアイヌ文書』です。南カラフト西岸ナヨロの首長の家に伝わった清国の公文書で、満文（満州語の文字）で書かれている点が大変めずらしいのです。他に、最上徳内自筆の添え書きなども含まれており、我が国では古くから知られていた北方文書です。この文書により、カラフト先住民と清国の関係、そして当時の日本との関わりがわかる、貴重な史料であるといわれています。文書は満文2通・漢文2通・和文9通の計13通で、戦後、樺太庁図書館から北大図書館に移りました。解読は北方言語に精通していなければ大変難しいのですが、北方資料室には逐語訳など邦訳が何種類かありますので、解読文を片手に満文の文書をご覧になってはいかがでしょうか。



満文で書かれた文書の一部 乾隆40年(1775年)

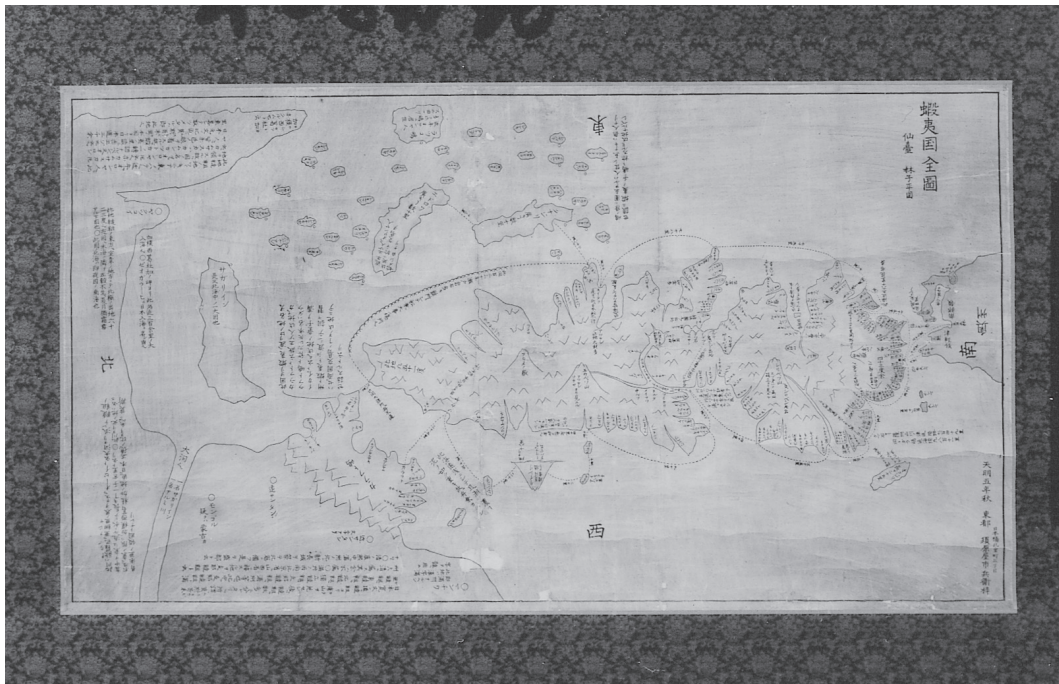
「樺太がふたつ！」—— 蝦夷国全図 (林子平)

北方資料室で常設展示をしている古地図のひとつです。中央に描かれた左右に細長い島が北海道(蝦夷)です。右端に下北半島や津軽半島があるため、ようやく日本の東北以北を著した地図であることがわかります。この絵図は、林子平の著書「三国通覧図説」の附図のひとつで、『三国』とは、朝鮮、琉球、蝦夷を指します。このことから、当時、北海道は日本を取り巻く隣国のひとつにすぎなかったことがわかります。林子平は、蝦夷地に渡ったことは一度もありません。書物から得た知識のみでこの図を著したのです。そのため、「サガリイン」と「カラフト嶋」という全く同じ地域(カラフト)が隣接していたり、「ラッコ嶋」という島が描かれたりしています。それ以外にも日本周辺の情報を細かく記しており、諸外国の様々な地図を合成したことがわかる興味深い地図です。



「三国通覧図説」
林子平 天明6年(1786年)

「三国通覧図説」附図『蝦夷国全図』



※「樺太展」では『蝦夷輿地全図』(『蝦夷国全図』の写)を展示しています